

『抹消された快楽』において抹消されるトランスの快楽

古怒田望人 (大阪大学)

『抹消された快楽』(2020)の冒頭でカトリーヌ・マラブーは「ターフから距離を取るラディカル・フェミニズムの立場」を自身が支持する立場のひとつとして表明している¹。「トランス排除的ラディカルフェミニスト (Trans-exclusionary radical feminist)」、通称「ターフ (TERF)」のトランスジェンダーに対する差別と暴力の言説は、2018年にお茶の水女子大学がトランス女子学生を受け入れることが報じられて以降、日本でも SNS を中心にその勢いを拡大させている²。このような状況下において、2020年に出版された本書のなかでマラブーが表明するこの立場は、哲学的言説の内部でトランスの存在を確保する戦略としてアカデミックな文脈だけではなく、社会、政治的な文脈においても肯定的に受け止めうるものである。

マラブーは本書において哲学を含めたこれまで多くの言説の中で抹消されてきたクリトリスの「快楽」にかんする場を素描し、その「快楽」にかかわる「複数の声が聞こえる」エクリチュールをさまざまな観点から実践している (PE:20)。彼女にとって「クリトリスに触れること」は「隔たりの経験」をなすことであり、その「隔たり」には「さまざまな身体」の間の隔たりが含まれる (PE:14)。したがって、クリトリスの「快楽」にかかわる「複数の声が聞こえる」エクリチュールの実践は、クリトリスという「無言のシンボル」(PE:15)を介してさまざまなレイヤー(「隔たり」)で不可視化されている身体経験を浮き彫りにさせることなのである。

そしてこの複数の声のひとつとしてマラブーはトランスの声を取り上げようとしている。そこで、作家、哲学者、キュレーターであるポール・B・プレシアドのホルモン投与による性別移行の経験を参照しつつ、彼女は「ピルや更年期の補充治療法を通じてホルモン含有物を摂取している以上、シス女性の身体はつねにすでにトランスなのではないだろうか」(PE:128、強調は原典)と問いかけている。このようにマラブーはシスとトランスとの間にホルモン投与の観点での連続性を見出すことで、トランスを排斥することのない哲学的言説の可能性を身体経験の水準から提起しているといえる。

しかし、マラブーのエクリチュールの内で、トランスの存在は本当に確保されているのだろうか。クリトリスという「抹消された快楽」を描き直す言説の内部で、トランスの「快楽」が抹消されていないだろうか。本論で私はこのような問いを『抹消された快楽』に対して投げかけることを試みたい。こうした問いはトランスの身体経験の水準から『抹消された快楽』それ自体を開かれたものにする可能性を手繰り寄せるだろう。

¹ カトリーヌ・マラブー『抹消された快楽——クリトリスと思考』(以下、PE) 西山雄二・横田祐美子訳、法政大学出版局、2021年、p. 19。尚、引用にあたっては原典 (Catherine Malabou, *Le plaisir effacé : Clitoris et pensée*, Bibliothèque Rivage, 2020) を適宜参照した。

² この点にかんしては例えば次の記事を参照 <https://wezz-y.com/archives/67425> (最終確認日: 2022年1月31日)

不可視化されるトランスの「男性性」

『抹消された快樂』におけるトランスの捉えられ方を明らかにし、その「快樂」が抹消されていることを明らかにするために、まず本節では、トランスに対するマラブーの言説がその「男性性」を不可視化させていることを確認したい。

マラブーは本書の第14節「現実の脱自帯」のなかで、トランスの経験を「女性的なもの」という概念から浮き彫りにしようとしている。彼女によれば、「女性的なもの」とは経験的な「女性性」だけを指し示すものではなく、「ジェンダーそのものに対するジェンダーの可塑性」(PE: 148)をも意味する。「女性的なもの」は、生物学的に「男/女」のような仕方で割り当てられる性別とは異なった「ジェンダーの可塑性」を含意する概念なのである³。このように「女性的なもの」を記述することで、マラブーは出生時に割り当てられる男女二元論に留まり切れないトランスのありようを含めたものとして「女性的なもの」を理論化しようとしていると考えられる。実際、プレシアドの性別移行の過程にかんして、彼女はプレシアドが「放棄したのは女性性であり、おそらく女性的なものではないだろう」と解釈している(PE: 151)。したがって彼女は、出生時に割り当てられた「女」という性別とは異なった生き方をするプレシアドのジェンダーに「女性的なもの」を見出すのである。

さらにトランス男性の性別移行一般にかんしても、マラブーは「女性的なもの」に焦点をあてる。トランス男性の「手術による性別移行[transition]」⁴において「何が消滅するのか、女性的なものうちで何が残るのか」(PE: 153、強調は引用者)という問いを彼女は提起している。マラブーはトランス男性の性別移行において変化するジェンダー(「何が消滅するのか」、「何が残るのか」)も「女性的なもの」から理解できると考えているのだ。

以上のように、マラブーはトランスの性別移行、特にトランス男性⁵の「性別移行」の経験をつねに「女性的なもの」概念から記述しようとしている。同時に、このような彼女の記述において、「男性的なもの」の観点には明確に否定される(PE: 154)。「^{マスキュリニテ}男性性がかならずしも^{ガイリリテ}男らしさとは一致せず、男性であるという解剖学的事実と一致しないということに異論の余地はない」としつつも、「「男性的なもの」に関しても(「女性的なもの」と)同じ問いが立てられる」ということはないとは彼女は断言している(ibid、カッコ内は引用者)。

だが、「女性的なもの」にトランスの存在や経験を含もうとするマラブーのこのような試みは、そのテキストの水準で失敗している。というのも、1) 「女性的なもの」と同じように「男性的なもの」を語る可能性を明確に否定し、2) それによって、トランス男性の性別移行の経験を、「男性(的なもの)」の「取り戻し」あるいは「獲得」ではなく、「女性的なもの」の「放棄」や「消滅」とみなすことで、

³ 実際、本書で「ジェンダーの可塑性」は「解剖された性器の宿命」に対する「ジェンダーの社会的な可塑性」とも言い換えられている(PE: 14)。

⁴ 翻訳では「手術による転換」となっているが原文は transition avec opération であるため、このように改訳する。以下、この箇所引用は同じく改訳したものである。

⁵ プレシアドは自身のジェンダーの呼び名を固定していないようだが、自身をトランス男性と呼称する場面がある(<https://revistaidees.cat/en/carta-dun-home-trans-a-lantic-regim-sexual/>[最終確認日: 2022 年 1 月 31 日])。そのため、プレシアドの経験も本論ではトランス男性の経験として捉えたい。

彼女はトランスの「男性性」をテキスト上で不可視化させているからだ。

確かに、本書でマラブーがさまざまな仕方で証明しているように、哲学的言説において「男性的なもの」は覇権的な地位を維持し続けてきた。しかし、その「男性的なもの」とはシスヘテロ男性のそれであって、トランスのそれではない。むしろ、トランスの「男性性」は存在しないものとされてきた。周司あきらが指摘するように、シス男性を中心に構成された社会においてトランス男性の存在は周縁化される。

一部のトランス男性はシス男性同様に社会的生活が営める一方で、その固有性はつねに無視されるため、トランス男性であることによって発生する孤独は解消されないままです。[...]社会的には男性目線で男性優位に構築されてきたシステムがあるとされていますが、それはシスジェンダーの男性の一部が中心であるにすぎません⁶。

マラブーによるトランスの「男性性」の不可視化は、こうした当事者が社会的に被っている周縁化や存在の否定をテキスト上で反復することではないだろうか。

加えて、この「男性性」の不可視化は、マラブーのテキスト引用の仕方にも見られる。彼女は、ジュディス/ジャック・ハルバースタム⁷の論文「トランスジェンダー・ブッチ——ブッチとFTMの境界の戦争と男性性連続体」(1998)の冒頭で論じられる、トランス男性、レズビアン、ブッチ⁸との間の対立関係を「女性的なもの」をめぐる対立と解釈している (PE: 152)。しかし、この論文でハルバースタムが注目するのは、以下の引用に見られるように「男性性」である。

私が本論で取り上げたいと願う問題の一つは、どのような男性性のモデルがブッチたちとFTMたちの間でなされている論争において問題となっているのか、また、もしそのようなものがあるとして、何がトランスセクシュアルの男性性とブッチの男性性を分け隔てているのかということである⁹。

このようにハルバースタムが論点としているのはブッチやトランス男性の「男性性」である。したがって、「女性的なもの」概念からハルバースタムの論文を解釈することで、ハルバースタムがこの論

⁶ 周司あきら『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』大月書店、2021年、pp. 210-211.

⁷ ハルバースタムは「ジュディス (Judith)」と「ジャック (Jack)」, 二つの呼び名を使い分けている。この呼び名にかんしては Jack Halberstam. *Trans* : A Quick and Quirky Account of Gender Variability*, University of California Press, 2018, pp. 153-154 を参照。

⁸ ブッチは男性的なジェンダーを表現するレズビアンであり、日本語でセクシュアリティにおける性役割を指す「タチ」ではない。したがって、「ブッチ」を「タチ [レズビアンの男役]」(PE: 152) と翻訳する邦訳は適切ではないだろう。

⁹ Judith Halberstam “Transgender Butch : Butch/FTM Border Wars and the Masculine Continuum” in *GLQ : A Journal of Lesbian and Gay Studies*, 4 : 2, Duke University Press, 1998, p. 287.

文で示そうとしているブッチやトランス男性の「男性性」をマラブーはテキスト引用の仕方においても不可視化させてしまっている。

シスジェンダーの観点

このような「男性性」の不可視化はどのような問題を生んでいるのだろうか。この点を考えるために、トランス男性の「手術による性別移行」へのマラブーの言説を批判的に分析したい。

マラブーは「手術を受けていないトランスのひとが好ましいと考えていた」(PE: 153) という誤った引用¹⁰をハルバースタムの論文から行った後、以下のように記している。

この(ハルバースタムの) 考察が私にとってとくに興味深いのは、手術による性別移行の場合にまさに何が放棄されるのかを勇気をもって問い質しているからである。つまり、何が消滅するのか、女性的なもののうちで何が残るのかを問い質しているのだ(PE: 153-154、カッコ内は引用者)

まずここで想起したいのは、「手術による性別移行」とマラブーが語る際に念頭に置いていたのは、トランス男性の性別移行だったことだ。このトランス男性の「手術による性別移行」において「女性的なもの」にかかわる「放棄」や「消滅」を彼女は議論しようとしている。

マラブーは何ら具体例に言及していないものの、トランス男性の「手術による性別移行」において「放棄」あるいは「消滅」するのは「胸」(「乳房切除手術」)あるいは「子宮、卵巣」(「子宮卵巣摘出手術」)である。そして、このようなトランス男性の「手術による性別移行」を「女性的なもの」の「放棄」あるいは「消滅」から語ろうとするマラブーの態度には大きな問題が孕まれている。というのも、切除される「胸」や摘出される「子宮、卵巣」を「女性的なもの」と表象することは、トランス男性の身体経験をトランス男性は(元)女性であるというシスジェンダーの観点から取り違えることに繋がるからだ。

この問題を具体的に理解するために、マラブーも本書の第12節で参照しているゲイル・サラモンの『身体を引き受ける』(2010)におけるトランス男性の乳房切除手術への表象に対する分析を引用したい(そのため、以下では特に乳房切除手術に焦点をあてて論じる)。

サラモンは「切除(mutilation)の波?」と題された節で、『ニューヨーク・タイムズ』に掲載されたシェーン・カヤという名のトランス男性の上半身を写した写真に対する「シェーン・カヤは乳房切除の痕をみせている」という見出しを以下のように分析する。

¹⁰ ハルバースタムの原文は「私が同様に暗に考察していたことは、手術を受けていないことに基づいてトランスとアイデンティファイする人の可能性である (I was also implicitly examining the possibility of the nonoperated-upon transgender-identified person)」(“Transgender Butch”, *art. cit.*, p. 289) である。そのため、マラブーの仏訳引用のようなあるトランスよりも別のトランスを「好む」といったニュアンスは存在しない。

この見出しはぎょっとさせる。それはそのトーンのためではなく——それは事実在即した淡々としたトーンである——、それが報道している内容と読者が最初に見るもの——単に男性的な身体——とのあいだのミスマッチのためである。たとえ、シェーンの胸部がいくら正常に見えようとも、それが見せているのはその見出しに従うなら、彼の男性性ではなく、その男性性を得るためになされた女性性への暴力なのだ。その見出しは男性の胸部ではなく、失われた乳房を見せているのである。そして私たち読者は、その証左として彼の身体を読むよう促され、シェーンの少し低い胸部の外形を跡づける痕跡——その男性性の偽りを示す「嘘」——を探し出すよう促されているのだ¹¹。

トランス男性の身体の「男性性」（「胸部」）ではなく、「その男性性を得るためになされた女性性への暴力」として「失われた乳房」を「読む」ように促すこの表象を、さらにサラモンは以下のように考察する。

胸に対する過度の関心、胸を「救おう」とする欲望、あるいは自分の胸を「切除」するために乳房切除手術を考えている「若い女性」を救おうとする欲望においては、性別移行は、トランス男性が胸の物質的な肉を犠牲にしてファルスという非物質的な特権を追い求める取引として理解されている。したがって、表面上はフェミニスト的な問題関心が提示しているのは、取り除かれた胸を、トランス男性が手放した女性性のシンボルとみなして嘆いてみせる陰険な試みなのである¹²。

マラブーが「女性的なもの」の「放棄」ないし「消滅」からトランス男性の「手術による性別移行」に言及するとき、「取り除かれた胸を、トランス男性が手放した女性性のシンボルとみなして嘆いてみせる陰険な試み」をそこに読み取らないでいることは困難だ。なぜなら、マラブーがトランス男性の乳房切除手術を含む性別移行を「女性的なもの」にかんする「放棄」や「消滅」と語るとき、彼女は「取り除かれた胸を、トランス男性が手放した女性性のシンボル」として表象しているからだ。しかし、サラモンが指摘するように「これらの胸は、それがまだトランス男性の身体の一部だったようなときにも、女性性のシンボルとして肯定されたり、明言されたりすることはめったにない」¹³のである¹⁴。

¹¹ ゲイル・サラモン『身体を引き受ける——トランスジェンダーと物質性のレトリック』藤高和輝訳、以文社、2019年、p. 179.

¹² 同前、p. 181.

¹³ 同前。

¹⁴ 「子宮卵巣摘出」にかんしても、子宮や卵巣はトランス男性にとって「耐えがたく一刻も早く（摘出の）手術を受けたい」（『トランスジェンダー男性によるトランスジェンダー男性学』前掲、p. 204. カッコ内は引用者）と感じるようなものとして経験されることがあると語られるように、「女性的なもの」として引き受けられることはほとんどないと考えられる。

したがって、マラブーの言説は「手術による性別移行」にかんする言説に至ると、トランス男性の身体経験の語り（元）女性の語りともみなす点でミスジェンダリングを引き起こしていると言える。マラブーはミスジェンダーの観点から、トランス男性の「男性性」の身体経験の語りを誤認している。

『抹消された快樂』において抹消される快樂

ここで、トランス男性の性別移行の経験において「女性的なもの」とマラブーが表象するのは、本書で主題となっている「クリトリス」という「抹消された快樂」の経験であると言われるかもしれない。実際、マラブーはトランスとシスが交わる側面として「クリトリスの多様性」(PE: 127)に言及しており、抹消されている身体経験という点でクリトリスの経験と連続した経験としてトランス男性の身体経験をマラブーは理解していると解釈することも不可能ではない。

しかし、「クリトリス」と「女性的なもの」から「抹消された快樂」をマラブーが取り上げるその仕方は、トランス男性の「快樂」の経験を取り逃がしてしまっている。「ペニスとは反対に、ファロスの法に従うことを拒絶するクリトリス」(PE: 14)という、ペニスとクリトリスを男女二元論的かつ二項対立的に語る本書の枠組みにおいて、トランス男性の「快樂」は居場所をもたないことになるのではないだろうか¹⁵。以下では、ハーバースタムとプレシアドというマラブーが本書で取り上げた二人の書き手を起点として男女二元論に留まり切れないトランス男性の「快樂」を記述することで、本書がそのトランス男性の「快樂」を抹消してしまっていることを明らかにしたい。

ハーバースタムは『トランス*』(2018)のなかで、プレシアドの『テスト・ジャンキー』(2008)を参照しつつ、ホルモン投与を含む様々な「薬学的エンハンスメント (pharmaceutical enhancement)」の観点から身体経験の構造を見直す必要性について語っている¹⁶。しかし、マラブーと同じくプレシアドのホルモン投与の経験を参照しつつも、ホルモン投与に留まらないトランスを取り巻く医療の問題にハーバースタムは踏み込む。そこでハーバースタムは、トランスの医療とセクシュアリティをめぐる言説にかんする J.R.レイサムの研究を参照する。このレイサムの研究の要点としてハーバースタムは次の四点を挙げている。1)「トランスジェンダリズムはクィア理論と医療的実践の双方において、特にトランス男性にかかわる広範囲の諸経験を打ち消すような単一の現象に単純化されてきた」、2)「トランスの身体のセクシュアリティとセクシュアルな実践は、単に無視されてきたとは言わないまでも、記述されてこなかった」、3)「セックスとジェンダーとセクシュアリティを「存在論的に多元的で、相互に構成し合うもの」とみなすこと」¹⁷、4)「現実を再考すること」特にミスジェンダー化された身体と経験を中心に置くことに対応するよう生産されている諸現実を再考すること、この四点

¹⁵ 以下では男女のバイナリーに収まりきれないトランスやノンバイナリー、ジェンダークィアの身体経験に特に注目して論を進める。このように論を進めるからと言って男女のバイナリーに居場所を見出すトランスを排除する意図は本論にはない。本論ではあくまでも『抹消された快樂』において抹消されているトランスの快樂の一つのありように注目することを目的としている。

¹⁶ *Trans**, *op. cit.*, pp. 28-29.

¹⁷ この主張はジェンダーとセックスの混同やジェンダー・アイデンティティとセクシュアル・オリエンテーションの混同を促すものではなく、それらのカテゴリーが相互に関係しあう仕方を探るものである。

である¹⁸。

これらの論点をめぐって、レイサムは論文「トランス男性のセクシュアルな語りの実践——トランス・スタディーズとセクシュアリティ・スタディーズへの STS (Science and Technology Studies) の導入」(2016) のなかで、セクシュアリティの実践の可能性を排除し、自己への強い嫌悪の感覚、特に自らの性器への強い嫌悪の感覚があることを仮定する「トランスの人々が自らの身体とかわる仕方にかんする伝統的で、そして臨床的な理解」¹⁹と反するトランス男性のセクシュアルな実践に着目している。レイサムはこのような実践の一例として「特定の身体部位を男性の(あるいはトランス男性の)領域 (register) へと意味づけ直す」²⁰実践を参照する。そこであるトランス男性たちは「ペニスあるいはクリトリスとは異なった何かを記述するための造語」²¹を使用しており、そこには次のような表現が含まれる。それは「ディックレット (dicklet)」、「ネオコック (neocock)」、「ハイブリッド (hybrid)」、「ブッチコック (butch-cock)」、「クリット/ディックあるいはクリック (clit/dick or click)」といった造語である²²。

こうした実践からは、性別違和の診断またそれに伴うホルモン治療や性別適合手術のために、自らの身体、特に性器を強く嫌悪しているといった医療がトランス当事者に求める語り²³とは異なった仕方、トランス男性によって身体が生きられていることが見て取れる。すなわち、このようなレイサムの研究は、シスジェンダーの観点が反映された理解によって意味づけられた男女二元論的な身体(「ペニスあるいはクリトリス」とは異なった仕方、トランス男性の「快楽」が生きられうることを示している。

ところで、「ディックレット」や「ネオコック」といったトランス男性の「快楽」を、本書で提示される概念で捉えることは困難である。トランスとシスの交錯を「クリトリスの多様性」から位置づけるマラブーの言説において、このようなトランス男性の「快楽」はクリトリスの経験として読み違えられてしまうだろう²⁴。あるいは、ペニスに近い語彙を用いていることから、クリトリスとペニスを男女二元論的かつ二項対立的に提示するマラブーの言説においては、「ディックレット」や「ネオコック」はシスヘテロ男性によって構築されてきたファルスの経験の類似物に置き換えられてしまうだろう。それは、サラモンの言葉を再び引用するのならば、トランス男性の性別移行を「トランス男性が胸の

¹⁸ *Trans**, *op. cit.*, p. 33.

¹⁹ J. R. Latham “Trans men’s sexual narrative-practices : Introducing STS to trans and Sexuality studies” in *Sexualities*, vol.19(3), 2016, p. 348.

²⁰ *Ibid.*, p. 357.

²¹ *Ibid.*

²² *Ibid.*, pp. 357-358.

²³ *Ibid.*, p. 348. ただし、身体に嫌悪を感じるトランスの存在を本論は排除するものではない。あくまでも「トランスは身体を嫌悪する」という命題が必ずしもトランスに当てはまるものではないことを示すことを目的としている。

²⁴ このような読み違いに対する当事者からの批判としては次を参照。「侮辱的に、トランス男性も「女性器をもつ」と表現されることはあります。たしかに表面的なパーツは女性のそれと同様に見受けられるのでしょう。しかしその内実はとっくに変えられていると言えますし、それが一当事者のリアルな感覚です」(『トランスジェンダー男性によるトランスジェンダー男性学』前掲、p. 135)。

物質的な肉を犠牲にしてフェルスという非物質的な特権を追い求める取引として理解」する誤認である²⁵。

おわりにかえて

シスジェンダー中心主義の根付いた社会や医療のなかでその存在が抹消されているトランス男性の「男性性」、その身体経験、そしてその「快樂」に対して『抹消された快樂』のエクリチュールはシスジェンダーの観点から再度抹消の印を刻んでいる。「複数の声が聞こえるように」するマラブーの試みは、トランスの声がある面をかき消している。しかし、このような『抹消された快樂』におけるトランスの快樂の抹消を指摘することは、クリトリスをめぐる言説に対する彼女の態度にある意味で則つたものである。本書の冒頭でマラブーはクリトリスを語ることのある種の両義性について記している。

そして、ある抹消を払いのけても、結局、おそらくはクリトリスを別の仕方をつねに抹消することになるからだ。ある現実を認めることは、別の方法で現実を誤認することではないだろうか。

(PE : 13)

本論はマラブーがテキスト上で行っているこうした「誤認」を明らかにすることで、彼女が認めるものとは異なった「抹消された快樂」の現実を明らかにした。それは、本書を批判的に開かれたものにするだけではなく、哲学を「脱シスジェンダー化」する試みである²⁶。この試みにおいては「ディックレット」や「ネオコック」といったトランスの生きられた「快樂」を含む記述をすることが求められる。そしてこの試みは、マラブーが本書で表明した「ターフから距離を取るラディカル・フェミニズムの立場」をトランスの「生きられた身体」の水準から哲学の内ですらに進める試みであり、この立場を真に受ける試みなのである。

²⁵ 『身体を引き受ける』前掲、p. 181、強調は引用者。また「ペニスという名のクリトリス」(蔦森樹『男でもなく女でもなく——本当の私らしさを求めて』朝日文庫、p. 219)を経験するトランス当事者、蔦森樹の経験はクリトリスを生物学的な女性という性別の経験に留めないマラブーの態度に沿ったもののように見えるが、トランス男性には言及しても、トランス女性には言及しない本書において本当に「ペニスという名のクリトリス」のような経験が受け入れられているのかは明らかではない。

²⁶ この点は「哲学すること」と「脱ジェンダー化すること」を引き離すマラブーの態度 (PE : 145) をさらに推し進めたものである。ただし、「脱ジェンダー化すること」の文脈で哲学を「アセクシュアリティ」という表現で批判するマラブーの態度 (PE : 145) は、アセクシュアルが現実には被っている抹消の問題を等閑視するものである (cf. 松浦優「メランコリックのジェンダーと強制的性愛——アセクシュアルの「抹消」に関する理論的考察」、『Gender & Sexuality』15号、国際基督教大学ジェンダー研究センター、2020年、pp. 115-137)。